

ジャック・ラカン「《盗まれた手紙》についてのセミナー」の翻訳と注釈(1)

ZAITSU, Osamu / 財津, 理

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

78

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

341

(終了ページ / End Page)

363

(発行年 / Year)

2011-03-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007463>

【研究ノート】

ジャック・ラカン「《盗まれた手紙》について
のセミナー」の翻訳と注釈（1）

財 津 理

はじめに

精神分析学の外部にまで大きな影響を与え続けている *Le Séminaire sur «La lettre volée»* は、それにもかかわらず難解で知られており、達意の翻訳がきわめて困難な作品である⁽¹⁾。

メルキオールは、誇張して次のように語っている。「ジャック・ラカン博士が死んだ1981年まで、かれの理論を真に理解することができたのは世界で二人しかいなかった。すなわち、かれ自身と神である⁽²⁾。」ラカンの文章には何か尋常ではないものがあり、英仏独の言語に堪能な思想研究の専門家でさえこのような冗談を言うほどである。

さて、ラカンのこの論文は、900頁を越える著書（論文集）*ÉCRITS*の第一部（I）に収められており、実質的には、巻頭論文である。このことが示唆しているように、この論文は、それに続く31篇の論文の象徴であり、同時にそれら諸論文の多様な議論から絶えず遡って読み返されるべきものである。

ヨーロッパ諸言語とは大きく異なる日本語に、ラカン独特のフランス語を転換する試みは、当然、やはり尋常ではない作業になるはずである。われわれの試訳は、「直訳」と「意訳」というかたちを取らざるを得ない。なぜ、二つのかたちを取るのかは、翻訳文としての日本語の可能性を実践的

に測深するためでもある。

この研究ノートで試みるのは、まさにこの *Le Séminaire sur «La lettre volée»* の翻訳と注釈の試みである。このタイトルを「《盗まれた手紙》についてのセミナー」と訳す。用いる原文は、インターネットで公開されている *Le Séminaire sur «La lettre volée» prononcé le 26 avril 1955 au cours du séminaire Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse, fut d'abord publié sous une version réécrite datée de mi-mai, mi-août 1956, dans La psychanalyse n° 2, 1957 pp. 15-44 précédé d'une «Introduction», pp.1-14.* である。

なお、*Le Séminaire sur «La Lettre volée»* in *ÉCRITS* (Éditions du Seuil, 1966) および、ジャック・ラカン『エクリ I』(宮本他訳, 弘文堂, 1972年) 所収「《盗まれた手紙》についてのゼミナール」(佐々木孝次訳) を参照した。

翻訳と注釈

以下、原文を段落ごとに、そして1文ずつ表示する。「《盗まれた手紙》についてのセミナー」における引用文以外のラカン自身による文章を、直訳と意識という二つのかたちで翻訳する。直訳とは、日本語としてはやや不自然であるが、原文の構造をできる限り見やすくする訳文を意味する。

エピグラフ

Und wenn es uns glückt,
Und wenn es sich schickt,
So sind es Gedanken.

「そんでそれがおいらに運よくできるなら、
そんでそれがうまく運ぶなら、
それが思考=思想というもんだ。」財津理訳

注釈

「《盗まれた手紙》についてのセミナー」本論の冒頭には、出典の明記なしに、以上のようなドイツ語の文章（エピグラフ）が置かれている。これは、ゲーテ『ファウスト』の「魔女の厨くりや」における「獣たち」の台詞である（行数2458～2460）。「魔女の厨くりや」という訳語は、森林太郎（鷗外）に従う。

さて、ラカンはなぜ、ゲーテのファウストのこの一節を本論のエピグラフにしたのだろうか。それを理解するためにも、このドイツ語が言わんとしているところを明らかにしなければならない。このエピグラフの理解に関しては、「《盗まれた手紙》についてのセミナー」の論点からして、それぞれの行に現れる《es》という代名詞、《glücken》、《schicken》という動詞、さらに《Gedanken》という名詞をどう解釈するかが問題になる。

ところで、ゲーテの『ファウスト』は早くも明治時代に訳されており、数え方にもよるが現在に到るまで二〇を越える翻訳作品が登場している。そこで、従来の主な邦訳を見ておこう。理論言語と詩的言語を区別できるとすれば、その差異を感じておくことは無駄ではあるまい。

(1) 「こつちとらに出来るなら、
こつちとらがして好いなら、
そんならそれが考かんがえだ。」森林太郎訳⁽³⁾

(2) 「それがわしどもに旨く行けば、
それが箆へらってくれさへすれば、

それが思想というものだ！」阿部次郎訳⁽⁴⁾

(3) 「わしらも^{さいわ}幸い

運がよければ、

思想があるといわれよう。」相良守峯訳⁽⁵⁾

(4) 「こちとらだって、うまくいって

ぐあいよく運べば、

思想があるというもんだ！」高橋健二訳⁽⁶⁾

(5) 「万に一つははずみもあるし、

運よく目の出るときもあり、

おのずと思想もついてくる。」大山定一訳⁽⁷⁾

(6) 「われわれだって、

運さえよければ、

思想を持てるさ。」高橋義孝訳⁽⁸⁾

(7) 「そしてまぐれあたりに

ぐあいよく行くと、

思想があると言われるのさ。」手塚富雄訳⁽⁹⁾

(8) 「それで運よく

まぐれが当たれば、

それが思想だっていわれるのさ！」山下肇訳⁽¹⁰⁾

以上はみな、原文の一種の意識であり、原文の諸単語の一部を省略した訳である。それらの訳文は、大同小異のようであり微妙に異なっている。

以上のエピグラフのドイツ語文の三行を、それぞれはっきり訳し分けているとは思われないものは、(3)、(6)、(8)である。おそらく、一行目の《glücken》という動詞と、二行目の《schicken》という動詞が似たような意味をもっているので、訳し分けることが難しかったのかもしれない。では、さらに一行一行詳しく見ていこう。

一行目の《Und wenn es uns glückt》の《uns》と《glückt》を共に省略せずに訳出したと思われるものは、(1)、(2)、(3)、(4)、(6)である。ただし、(3)と(6)は、いま述べたように、一行目と二行目をまとめ、一文として訳出したのかもしれないが、今は、一行目の訳文とみなす。

さて、《glückt》は、(1)「出来るなら」、(2)「旨く行けば」、(3)「幸い運がよければ」、(4)「うまくいって」、(5)「万に一つははずみもあるし」、(6)「運さえよければ」、(7)「まぐれあたりに」、(8)「運よくまぐれが当たれば」である。ただし、以上は、《wenn》も含めた訳語である。

二行目の《Und wenn es sich schickt》を、一行目の《uns》に関係づけずに、はっきりと独立して訳出したものは、(2)、(5)である。(2)は「それが箆ってくれさへすれば」、(5)は「運よく目の出るときもあり」である。ただし、(5)では、《glücken》と《schicken》の訳し分けが不明瞭である。

三行目の《Gedanken》は、森鷗外は「^{かんがえ}考」と訳し、以上の他の翻訳ではすべて「思想」となっている。

このように見てくると、以上の八種類の訳文のうち、もっとも原文の構造に忠実な翻訳は(2)の阿部訳であると言わなければならない。事実、三つの《es》をみな訳出したものは、阿部訳のみである。なぜ、阿部以外の訳者は《es》を訳さなかったのだろうか。《es》をはっきりと日本語にしなかった訳者たちは、おそらく、《es》を、例えば天候を表す文の場合のように「非人称」の代名詞とみなしたのであろう。

だが、このような日本語における一種の詩的言語の翻訳では、「《盗まれた手紙》についてのセミナー」の原文における理論言語の含意の解明には

役に立たない。上記のゲーテの文章は、かざりでラカンのこの論文の冒頭に置かれているわけではないからである。

ところで、ゲーテの韻文は、《Und wenn es . . . , Und wenn es . . . 》というように、同じ言葉を繰り返すことによって心地よいリズムを出している。できる限りそのリズムとすべての単語を生かして訳したものが、われわれの上記の翻訳である。ただし、原文の脚韻は日本語に転換できないし、もちろんラカンにとっては、原文のリズムは問題になっていないだろう。そこで、もう一度、われわれの訳を検討してみよう。

Und wenn es uns glücklich, : そんで ^{エス}それが ^{ウンス}おいらに ^{グリュックト}運よくできるなら、
Und wenn es sich schickt, : そんで ^{エス}それが ^{ジッヒシックト}うまく運ぶなら、
So sind es Gedanken. : ^{エス}それが ^{ゲダンケン}思考=思想というもんだ。

《es》を「^{エス}それ」と訳した。

ラカンの「『盗まれた手紙』についてのセミナー」のエピグラフとしては、われわれは、《es》は当然、フロイトの《Wo Es war, soll Ich werden》＝「エスがあったところに、私なるものが生成しなければならない⁽¹¹⁾」という有名な文章の《Es》を示唆しているとみなすべきだろう。ÉCRITSのなかで、このフロイトの命題に言及している箇所は、数え方にもよるだろうが、9箇所以上ある⁽¹²⁾。

上のドイツ語原文の一行目の《glücklich》を、《Glück》の意味である「運」を生かして、「^{グリュックト}運よくできる」と訳した。

二行目の《sich schickt》を、《Geschick》の意味である「運」を生かして、「^{ジッヒシックト}うまく運ぶ」と訳した。

ところで、いくつかの漢和辞典では、「運」は「めぐる（めぐらす）」、「まわる（まわす）」、「はこぶ」、「めぐりあわせ」などを意味する。では、

《Glück》や《Geschick》を、「幸運」や「不運」などの「運」、つまり「やまとことば」での「めぐりあわせ」という意味での「運」として訳すなら、この「運」は、「偶然」を意味するのだろうか、あるいは「必然」を意味するのだろうか。まさにこれが、「《盗まれた手紙》についてのセミナー」における諸テーマのひとつである。

「《盗まれた手紙》についてのセミナー」において、この「運」を含意するフランス語は、《chance》と《hasard》である。

《chance》という語は、4箇所使われており⁽¹³⁾、日本語としては、つまり日本語化した漢字としては、「機会」と訳すことができる。が、「機会」という日本語も、やはり「めぐりあわせ」という意味をもつ。

《hasard》という語は、10箇所以上で用いられており⁽¹⁴⁾、すべて「偶然」と訳すことができる。ただし、《hasard》という記号的意味作用者（シニフィアン）は、それが「たんなる」偶然を意味する限り、この論文の最後の登場場面で、《lois》すなわち「法／法則」によって先立たれることが示唆される。

上のドイツ語原文の三行目の《Gedanken》を「^グ^ダ^ン^{ケン}思考＝思想」と訳した。

「思考」がたんなる心理的プロセスの意味での「考え」指し、「思想」が神、世界、精神、社会などに関する哲学的省察の体系を指すとすれば、《Gedanken》を、思考と思想のどちらかの言葉に当てはめてしまうことは不可能である。

以下の第5段落にあるように、《la pensée freudienne》という言い方では、《pensée》は「思考」よりも「思想」と訳すべきだろう。

他方、*LE SÉMINAIRE LIVRE XI* (Éditions du Seuil, 1973) p44では、《Gedanken》というドイツ語は《pensées》というフランス語に転換されている。ここでは、《Gedanken, des pensées》は「思考」と訳した方がよいだろう。「……無意識は、意識には本質的に拒否されているものから構

成されている、とフロイトは断言している。それを、フロイトはどのように呼んでいるだろうか。……まさに思考[Gedanken, des pensées]という用語で呼んでいる。」とある⁽¹⁵⁾。

また、同書では、「無意識の主体が顕現すること、そして〔デカルト的な〕確信の主体が確信に入る前に、それが思考する〔ça pense〕ということ、これをわれわれはフロイトのおかげで知っている。」というラカンの叙述がある⁽¹⁶⁾。

したがって、われわれは、上記のエピグラフの《Gedanken》を「思考＝^{ゲザン}思想」と訳した。

このように、『ファウスト』から引用された以上のエピグラフは、ラカンの文章にそのまま対応するわけではないが、ドイツ語の各単語、《es》、《glückt》、《sich schickt》、《Gedanken》の潜在的な意味連関が、「《盗まれた手紙》についてのセミナー」におけるラカンのテーマを示唆し、象徴していると言えるだろう。そして、ラカンは、この論文の末尾で、再び『ファウスト』の一節に言及している⁽¹⁷⁾。鴉外の訳を少し変えるとすれば、「ライブチヒなるアウエルバハの^{ケラ}地下酒場」の一節である。ここでは、この一節によって、「偶然」は「法＝法則」を前提とすることが示唆される。

ポーの『盗まれた手紙』に密着するラカン/フロイトの思想は、ゲーテの『ファウスト』における「魔女の^{くりや}厨」と「ライブチヒなるアウエルバハの^{ケラ}地下酒場」によって輝く。

第1段落

① Notre recherche nous a mené à ce point de reconnaître que l'automatisme de répétition (*Wiederholungszwang*) prend son principe dans ce que nous avons appelé l'*insistance* de la

chaîne signifiante.

直訳：「われわれの探究が、われわれを、次の事を再認する地点にまで導いた。すなわち、われわれが記号的に意味する連鎖の執拗な存続と呼んだもののなかで、反復自動症（反復強迫）がおのれの原理を把握するという事をである。」

意識：「反復自動症（反復強迫）の原理は、われわれが記号的に意味する連鎖の執拗な存続と呼んだもののなかで把握されるわけだが、このようなことを、われわれは、これまでの探究によって再認するに至ったのである。」

注釈

《prend》を、「把握する」と訳す。

《chaîne signifiante》を「記号的に意味する連鎖」と訳す。

《signifier》という動詞を「記号的に意味する」と訳す。

《chaîne》を「連鎖」と訳す。ÉCRITS p502に、「いくつかの小さな輪でできた首輪状の鎖」の比喩が示されている。

やはりp502に《chaîne du signifiant》, p799に《chaîne de signifiants》という似た表現がある。

《insistance》を「執拗な存続」と訳す。

LE SÉMINAIRE LIVRE XI p53～54に、《de l'automaton, du retour, de la revue, de l'insistance des signes》とある。したがって、《insistance》は、《automaton》, 《retour》, 《revue》の言い換えであろう。したがって、「執拗な存続」は「自発的運動、回帰、再帰」と関連する意味をもつだろう（邦訳p72）。

フロイトの反復強迫 (Wiederholungszwang) という名称を、ラカンは、反復自動症 (automatisme de répétition) と呼ぶ。

ÉCRITS p43 (『エクリ I』p51) に、「反復を、フロイトは自動症 (automatisme) と呼んでいる」とある。

『フロイト著作集 6』(人文書院, 1970年) p340に、強迫神経症に関して「成人してから自動的に (automatisch) 行われるはずの行為」という記述がある。

したがって、ラカンのこの用語は、必ずしもジャンネの《automatisme psychologique》、クレランボアの《automatisme mental》に基づいているわけではないだろう⁽¹⁸⁾。

② Cette notion elle-même, nous l'avons dégagée comme corrélatrice de l'ex-sistence (soit : de la place excentrique) où il nous faut situer le sujet de l'inconscient, si nous devons prendre au sérieux la découverte de Freud.

直訳：「この概念そのものを、われわれは、外への一存立 (すなわち、中心から外れた場所) との相関者として顕わにしたのであり、われわれは、フロイトの発見を真剣に把握すべきである以上、そこに無意識の主体を位置づけなければならない。」

意識：「われわれは、この概念そのものつまり執拗な存続^{アンシスタンス}を顕わにして、外への一存立 (すなわち、中心から外れた場所) と相関するものとみなしたのであって、フロイトの発見を真剣に把握すべきである以上、無意識の主体を〈外への一存立〉に位置づけなければならない。」

注釈

《ex-sistence》を「外への一存立」と訳す。

ÉCRITS p629に、《ex-sistence (Entstellung) du désir》とある。すなわち「欲望の〈外への一存立〉(Entstellung)」(『エクリⅢ』p64)。

ここで注意すべきは、《ex-sistence》というラカンのフランス語が、《Entstellung》というフロイトのドイツ語を指していることである。《Entstellung》は、ふつうフランス語で《déformation》、日本語で「歪曲」と訳される。しかも、精神分析用語としてではなく、日常使われるドイツ語としても「歪曲」と訳される。だが、ラカンはこのような解釈を取らない。ÉCRITS p629の原注1,あるいは邦訳『エクリⅢ』ではp89の原注(14)を参照すべきである。

ÉCRITS p662 (『エクリⅢ』p111)に、決定的に重要なラカンの指摘がある——「欲動 [pulsions] は、外に一存立する [ex-sistent] のだから、おそらく一切はそこ [là] に存在する。すなわち、そこにおいては、欲動はおのれの場所 [place] に存在ということ、欲動はあのEntstellungにおいて、われわれの表現では、あの位置変更 [dé-position] において、あるいはそう言ってよければ、置き換えられた [場所換えした] [déplacées] 人物たちのあの混雑において、みずからを提示するということである。」

《place excentrique》を、「中心から外れた場所」と訳す。

ÉCRITS p417 (『エクリⅡ』p134)に、「フロイトが、絶対的主観性を、まさしくその根本的な〈中心から外れること [excentricité]〉において発見した」とある。

《sujet de l'inconscient》を、「無意識の主体」と訳す。

すでに述べたように、ÉCRITS のなかで、フロイトの言葉《Wo Es war, soll Ich werden》＝「エスがあったところに、私なるものが生成しなければな

らない」に言及している箇所は9箇所以上あるが、ここではそのp864（『エクリIII』p401）のラカン自身の仏訳における「主体」を確認しておこう。「それがあったところに、私なるものは、主体として〔comme sujet〕生成する。」

また、すでに言及したように、『精神分析の四基本概念』p47では、「無意識の主体が顕現すること、そして〔デカルト的な〕確信の主体が確信に入る前に、それが思考する〔ça pense〕ということ、これをわれわれはフロイトのおかげで知っている」というラカンの叙述がある。

③ C'est, on le sait, dans l'expérience inaugurée par la psychanalyse qu'on peut saisir par quels biais de l'imaginaire vient à s'exercer, jusqu'au plus intime de l'organisme humain, cette prise du symbolique.

直訳：「〈象徴的なもの〉についての把握が、どのような〈想像的なもの〉の間接的諸手段によって、人間の生体のもっとも内奥のところにまで行使されるようになるのかという事が理解されるのは、周知のように、精神分析によって創始された経験においてである。」

意識：「象徴的なもの〔象徴界〕についての以上のような把握が、どのように想像的なもの〔想像界〕の間接的諸手段によって、人間の生体のもっとも内奥のところにまで行使されるようになるのだろうか。この問いの答えは、周知のように、精神分析によって創始された経験のなかで理解されるのである。」

注釈

《prise》を、「把握」と訳し、この段落のなかの最初の文章に現れる《prendre》と同義とみなす。

《biais》を「間接的諸手段」と訳す。この言葉は、「《盗まれた手紙》についてのセミナー」のなかでは、ここにしか現れていない。これは、次に段落のなかの《incidences》によって言い換えられるとみなす。

《organisme humain》を、「人間の生体」と訳す。

《le plus intime de l'organisme humain》を、「人間の生体のもっとも内奥のところ」と訳す。これは「ペニス」を指すとみなすことができるだろう。この文章によって、「ペニス」と「ファルス」の関係が示唆されていると考えることができるだろう。

「人間という動物が、象徴的秩序から決定を受け取る。」(ÉCRITS p46, 『エクリ I』 p53)

「ファルスは、ファルスが象徴となっている器官、すなわちペニスやクリトリスではない。……ファルスは、^シ記号的^ニ意味^フ作用者^イである。」(ÉCRITS p690, 『エクリ III』 p153)

「ファルスは、勃起の器官として想像されたペニスである。」(*Radiophonie, Scilicet*, 2-3: 55-99, 1970, p90, 『ディスクール』 弘文堂, 1985年, p148)

「ファロスの想像的機能を、フロイトは、象徴的なプロセスの主軸として明らかにした。」(ÉCRITS p555, 『エクリ II』 p319)

第2段落

L'enseignement de ce séminaire est fait pour soutenir que ces

incidences imaginaires, loin de représenter l'essentiel de notre expérience, n'en livrent rien que d'inconsistant, sauf à être rapportées à la chaîne symbolique qui les lie et les oriente.

直訳：「このセミナーの教育は、以下の事を主張するために行われる。すなわち、それら想像的諸影響は、それらを結び合わせ方向づける象徴的連鎖に関係づけられることはあるにしても、われわれの経験の本質的なところを表わすどころか反対に、その不整合なところ以外の何ものをも手渡ししてくれない、という事である。」

意識：「そのような想像的な諸影響〔間接的諸手段〕は、象徴的連鎖〔記号的に意味する連鎖〕に関係づけられ、この象徴的連鎖によって結び合わされ方向づけられるにしても、そのような想像的諸影響は、われわれの経験の本質的なところは表わさず、かえって、われわれの経験の不整合なところしか教えてくれない。このセミナーの教育は、まさに以上の事を主張するために行われるのである。」

注釈

《incidences》を、「諸影響」と訳す。第1段落の3番目の文章の《biais》つまり「間接的諸手段」の言い換えとみなす。

第3段落

① **Certes savons-nous l'importance des imprégnations imaginaires (*Prägung*) dans ces partialisations de l'alternative symbolique qui donnent à la chaîne signifiante son allure.**

直訳：「なるほど、われわれは、象徴的二者択一のあの偏りのなかでの、すなわち記号的に意味する連鎖にその進み具合を与えているそうした偏りのなかでの、想像的刷り込み（刻印づけ）の重要性を知っている。」

意訳：「なるほど、^{シニフィアント}記号的に意味する連鎖の進み具合であるあの偏りのなかでは、つまり象徴的二者択一の偏りのなかでは、想像的刷り込み（刻印づけ）が重要であることを、われわれは知っている。」

注釈

《alternative》を、「二者択一」と訳す。

「在る〔présence〕と無い〔absence〕の二者択一」（*ÉCRITS* p46, 『エクリ I』 p53～54）

《partialisations》を、「偏り」と訳す。

「象徴的決定が、現実的なもののあらゆる偏り〔partialité〕を記録する。」（*ÉCRITS* p51, 『エクリ I』 p62）

《allure》を、「進み具合」と訳す。

たとえば、*ÉCRITS* p47（『エクリ I』 p54）の（+）と（-）の連続を示唆していると思われる。

② Mais nous posons que c'est la loi propre à cette chaîne qui régit les effets psychanalytiques déterminants pour le sujet : tels que la forclusion (*Verwerfung*), le refoulement (*Verdrängung*), la dénégation (*Verneinung*) elle-même, — précisant de l'accent qui

y convient que ces effets suivent si fidèlement le déplacement (Entstellung) du signifiant que les facteurs imaginaires, malgré leur inertie, n'y font figure que d'ombres et de reflets.

直訳：「けれども、主体にとって決定的な精神分析上の諸結果を支配するのは、まさにそうした連鎖に固有の法である、ということをおれわれは主張するのである。精神分析学上の諸結果とは、例えば、排除 (Verwerfung)、抑圧 (Verdrängung)、否定 (Verneinung) そのものである。——われわれは、それら諸結果が、たいへん忠実に記号的意味作用者の置き換え〔場所換え〕 (Entstellung) に従っているのを、想像的諸要因が、それらの惰性に反して、そこでは影や反映といった形態しか呈さないということを、それにふさわしい強調をもって明言しておく。」

意訳：「けれどもわれわれは、次のように主張したい。すなわち、そうした記号的に意味する連鎖〔象徴的連鎖〕に固有な法こそが、主体にとって決定的な精神分析上の諸結果を支配するのだ、と主張したい。精神分析上の諸結果とは、例えば、排除 (Verwerfung)、抑圧 (Verdrängung)、否定 (Verneinung) そのものである。われわれは、そのような精神分析上の諸結果が、たいへん忠実に記号的意味作用者の置き換え〔場所換え〕 (Entstellung) に従っているのを、想像的諸要因が、ずっと存続しながらも、そこでは影や反映のような姿しか呈さないということを、しかるべき強調をもって明言しておこう。」

注釈

《déplacement》を、「置き換え〔場所換え〕」と訳す。

すでに述べたように、《Entstellung》は、ふつうは、フランス語で《déformation》、日本語で「歪曲」と訳され、他方《déplacement》は、精

神分析用語としてはフロイトのドイツ語《Verschiebung》の仏訳語であり、「置き換え」あるいは「移動」と訳されている。第1段落②の注釈を参照されたい。

第4段落

Encore cet accent serait-il prodigué en vain, s'il ne servait à votre regard, qu'à abstraire une forme générale de phénomènes dont la particularité dans notre expérience resterait pour vous l'essentiel, et dont ce ne serait pas sans artifice qu'on romprait le composite original.

直訳：「とはいえ、そうした強調は、もしもあなた方のまなざしには、諸現象の以下のような或るひとつの一般的形式を抽象するのになら役立たないのだとするならば、無駄に浪費されたということにもなるだろう。その一般的形式とは、われわれの経験におけるその特殊性が、あなた方にとっては本質的なものにとどまるような形式のことであり、また、それ独特の混合様式を解消するのは、人為的な方便なしでのことではないであろうといった形式のことである。」

意識：「とはいえ、そうした強調は、あなた方のまなざしには、諸現象〔諸結果〕の以下のような或るひとつの一般的形式を抽象的に取り出すことにしか役立たないということにでもなれば、無駄に浪費されたということになってしまうだろう。或るひとつの一般的形式とは、われわれの経験においては特殊であるが、あなた方にとってはいぜんとして本質的でもあるような形式のことであり、また、人為的な方便がなければそれ独特の〔特殊のかつ本質的な〕混合様式を解消できないといった形式のことである。」

《phénomènes》を、「諸現象」と訳し、第3段落の二番目の文章のなかの《effets》の言い換えとみなす。

《composite》を、「混合様式」と訳す。《composite》は、建築用語としては、古代ローマにおける円柱の柱頭装飾に二つの異なる様式が複合的に用いられていることを意味するが、ここでは、「諸現象の一般的形式がラカンにとっては特殊的であると同時に非ラカンの立場には本質的である」という事態を指すとみなす。

第5段落

C'est pourquoi nous avons pensé à illustrer pour vous aujourd'hui la vérité qui se dégage du moment de la pensée freudienne que nous étudions, à savoir que c'est l'ordre symbolique qui est, pour le sujet, constituant, en vous démontrant dans une histoire la détermination majeure que le sujet reçoit du parcours d'un signifiant.

直訳：「だからこそ、主体が或るひとつの記号的意味作用者の^{シニフイアン}の経路から受け取る主要な決定を或るひとつのストーリーのなかであなた方に論証することによって、われわれは、われわれが研究しているフロイトの思想を契機として顕わになる真理を、すなわち、主体にとって構成要素的であるのは象徴的秩序であるという真理を、今日あなた方に、例証しようと考えたのである。

意識：「だからこそわれわれは、われわれが研究しているフロイトの思想を契機として顕わになる真理を、今日あなた方に例証しようと考えた。すなわち、主体にとって構成要素的であるのは象徴的秩序〔象徴的連鎖、^{シニ}^ニ^フ^イ^ア^ン^ト連鎖〕である、という真理を例証しようと考えたのである。そしてこの場合、主体が或るひとつの^{シニ}^ニ^フ^イ^ア^ン記号的意味作用者〔盗まれた手紙〕の経路から受け取る主要な決定を、或るひとつのストーリーのなかであなた方に論証することになる。」

注釈

《un signifiant》を、「或るひとつの^{シニ}^ニ^フ^イ^ア^ン記号的意味作用者」と訳し、これを「盗まれた手紙」とみなす。

「盗まれた手紙は純然たる^{シニ}^ニ^フ^イ^ア^ン記号的意味作用者であるが、この^{シニ}^ニ^フ^イ^ア^ン記号的意味作用者が占めるようになる場所 (place) によって、諸主体〔たとえば、王と王妃とデュパン〕の置き換え〔場所換え〕(déplacement) が決定される。」(ÉCRITS p47, 『エクリ I』p14)

《histoire》を、「ストーリー」と訳す。まさにエドガー・アラン・ポー『盗まれた手紙』を指す。

「《盗まれた手紙》についてのセミナー」の総括的意識

sonde^エ^スが運よくおいらにできるなら、
sonde^エ^スがうまく運ぶなら、
sonde^エ^スが思考=思想というもんだ。

反復自動症（反復強迫）の原理は、われわれが記号的に意味する連鎖の執拗な存続と呼んだもののなかで把握されるわけだが、そのことを、われわれは、これまでの探究によって再認するに至ったのである。われわれは、この概念そのもの、つまり執拗な存続を頭わにして、〈外への一存立〉（すなわち、中心から外れた場所）と相関するものとみなしたのであり、われわれは、フロイトの発見を真剣に把握すべきである以上、無意識の主体を〈外への一存立〉に位置づけなければならないのである。象徴的なもの〔象徴界〕についての以上のような把握が、どのように想像的なもの〔想像界〕の間接的諸手段によって、人間の生体のもっとも内奥のところまで行使されるようになるのだろうか。この問いの答えは、周知のように、精神分析によって創始された経験のなかで理解されるのである。

そのような想像的な諸影響〔想像的なものの間接的諸手段〕は、象徴的連鎖〔記号的に意味する連鎖〕に関係づけられ、この象徴的連鎖によって結び合わされ方向づけられるにしても、そのような想像的諸影響は、われわれの経験の本質的なところは表わさず、かえって、われわれの経験の不整合なところしか教えてくれない。このセミナーの教育は、まさに以上の事を主張するために行われるのである。

なるほど、記号的に意味する連鎖の進み具合であるあの偏りのなかでは、つまり象徴的二者択一の偏りのなかでは、想像的刷り込み（刻印づけ）が重要であることを、われわれは知っている。けれどもわれわれは、次のように主張したい。すなわち、そうした記号的に意味する連鎖〔象徴的連鎖〕に固有な法こそが、主体にとって決定的な精神分析上の諸結果を支配するのだ、と。精神分析上の諸結果とは、例えば、排除（*Verwerfung*）、抑圧（*Verdrängung*）、否定（*Verneinung*）そのものである。われわれは、そのような精神分析上の諸結果が、たいへん忠実に記号的意味作用者の置き換え〔場所換え〕（*Entstellung*）に従っているので、想像的諸要因が、ずっと存続しながらも、そこでは影や反映のような姿しか呈さないということを、しかるべき強調をもって明言しておこう。

とはいえ、そうした強調は、あなた方のまなざしには、諸現象〔精神分析上の諸結果〕の以下のような或るひとつの一般的形式を抽象的に取り出すことにしか役立たないということにでもなれば、無駄に浪費されたということになってしまっただろう。或るひとつの一般的形式とは、われわれの経験においては特殊であるが、あなた方にとってはいぜんとして本質的であるような形式のことであり、また、人為的な方便がなければそれ独特の〔特殊のかつ本質的な〕混合様式を解消できないような形式のことである。

だからこそわれわれは、われわれが研究しているフロイトの思想を契機として顕わになる真理を、今日あなた方に例証しようと考えた。すなわち、主体にとって構成要素的であるのは象徴的秩序〔象徴的連鎖、記号的に意味する連鎖〕である、という真理を例証しようと考えたのである。そしてこの場合、主体が或るひとつの記号的意味作用者〔盗まれた手紙〕の経路から受け取る主要な決定を、或るひとつのストーリーのなかであなた方に論証することにしたい。

〈注〉

(1) *Le Séminaire sur « La lettre volée » prononcé le 26 avril 1955 au cours du séminaire* は、*ÉCRITS* (Éditions du Seuil, 1966) に再録され、『エクリ I』(弘文堂, 1972) のなかで「《盗まれた手紙》についてのゼミナール」として訳されている。われわれの訳の公開は、弘文堂から口頭で許可を得ている。

(2) メルキオール『現代フランス思想とは何か』(財津理訳, 河出書房新社2001年, p210)

(3) ゲーテ『ファウスト』第一部(森林太郎訳, 『岩波文庫』, 1928年) p141

(4) ゲーテ『ファウスト』第一部(阿部次郎訳, 国立書院, 1949年) p224

(5) ゲーテ『ファウスト』第一部(相良守峯訳, 『岩波文庫』, 1958年) p170

(6) ゲーテ『ファウスト』(高橋健二訳, 『角川文庫』, 1967年) p141

(7) ゲーテ『ファウスト』(大山定一訳, 『筑摩世界文学体系24』, 1972年) p61

(8) ゲーテ『ファウスト』(高橋義孝訳, 『新潮世界文学4』, 1971年) p74

(9) ゲーテ『ファウスト』悲劇第一部(手塚富雄訳, 『中公文庫』, 1974年) p177

(10) ゲーテ『ファウスト』(山下肇訳, 『ゲーテ全集3』, 潮出版, 1992年) p74

(11) フロイト『精神分析入門(続)』(懸田克躬・高橋義孝訳, 『フロイト著作集1』, 人文書院, 1971年) p452。周知のように、フロイトは《Es》という言葉をごロデックから借りており、さらにその言葉の由来をニーチェに求めている。同書p446, 『自我とエス』(井村恒郎・小此木啓吾他訳, 『フロイト著作集』人文書院, 1970年) p273参照。S.FREUD, *GESAMMELTE WERKE X V*, S.FISCHER VERLAG, 1979, s.75。S.FREUD, *GESAMMELTE WERKE X III*, S.FISCHER VERLAG, 1976, s.251。「……〈それが〉思う——(es denkt)——, だがしかしこの〈それ〉(es)をば, ただちにあの古くして有名な〈われ〉だとみなすのは, 控え目に言っても, 一つの仮定, 一つの主張にすぎないもので, ましてや〈直接的確実性〉などでは決してない」(ニーチェ『善悪の彼岸』, 信太正三訳, ちくま学芸文庫版『ニーチェ全集11』, 1993年) p040。 *Jenseits von Gut und Böse* in 《Friedrich Nietzsche Werke 2》, Carl Hanser Verlag, 1981, s. 22.

(12) *ÉCRITS*, p416, p417, p426, p524, p585, p801, p842, p864, p865. 『エクリ II』 p133, p134, p145, p277, 『エクリ III』 p88, p308, p367, p401, p402。

(13) *ÉCRITS*, p20, p58, p61, p71.

(14) *ÉCRITS*, p12, p39, p39原注(1), p43, p47, p47原注(1), p51(2箇所あり), p60(4箇所あり), p61。

(15) *LE SÉMINAIRE LIVRE XI*, Éditions du Seuil, 1973, p44. 『精神分析の四基本概念』(小出他訳, 岩波書店, 2000年) p57。

(16) 同原書p37, 同邦訳書p47。

(17) *ÉCRITS*, p61, 『エクリ I』 p74。

(18) P. JANET, *L'AUTOMATISME PSYCHOLOGIQUE*, FELIX ALCAN, 1921. G. DE CLERAMBAULT, *AUTOMATISME MENTAL* in G. DE CLERAMBAULT : *OEUVRE PSYCHIATRIQUE*, P.U.F, 1942. 『クレランボ—精神自動症』針間博彦訳, 星和書店, 1998年。